

C-49 近世における農民の服飾美意識(第1報)-絳模様の発生過程よりみた-  
 県立新潟女短大 山崎光子

目的 歴史が各時代の支配者層を中心に展開されやすいように、服飾美も富裕な上層階級の衣服を対象として評価されることが多い。しかし、その階層の経済的基盤を支えているのは総人口の8~9割を占める被搾取階級であり、彼等農民も衣服を着用し、美的認識をもつ人間であつてみれば、彼等自身の高度な服飾美を形成することも可能なのではないだろうか。その観点からこの問題を取りあげ、今報では服飾美意識の一表現形態である絳模様に内容をしぼり、その創造過程の概略を史的に考察した。

方法 絳の製織地と綿作地がほぼ重なりあつてゐることから、両者間に密接な関係があると判断し、木綿と手がかりに絳模様の発生過程を検討した。資料としては、江戸時代の政治、経済史的文献を用いた。

結果 江戸幕府の綿作奨励保護政策と、それらにともなう商品流通の発展などが、逐次、農村に経済的余剰をもたらし、それは精神的豊かさへと連なり、また木綿のいろいろな機能性が人間の本来持っている美意識を触発し、既に身につけていた機織技術による表現へとかりたてた。さらに奢侈禁止令が素材、色、染模様の選択を規制したため、美意識は織模様の創造へと凝集され、外部からのわがかな刺激と得ること、わが国特有な絳模様を生みだす結果となつた。その絳が農民の間に定着するにとどまらず、たちまち、すべての階層の日常生活の中に浸透してゆき、そして今日まで、なお受け継がれてゐるということは、これからの服飾美と扱う上での一つの方向と示唆するものではないだろうか。